2023年度入学試験問題

国　語

注　意

一　問題冊子は一冊（十八ページ）、解答用紙は二枚です。

二　試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等により解答できない場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。

三　すべての解答用紙に、それぞれ二箇所受験番号を算用数字で記入しなさい。

四　解答は、すべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。

五　試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

問題　一

次の文章を読んで後の問に答えなさい。（出題の都合上、本文に手を加えたところがある。）

電車の窓越しに見た桜の花が、うっすらとした青い空を背に鮮やかで、ふと鞄（かばん）からスマートフォンを取り出して、「①桜がすっかりきれいに咲いているよ」と恋人へメッセージを送る。少しして恋人から、「こちらもいま桜をアナガめていたところだよ。お花見でもしたい日和だね」と返事が来る。私たちは互いに何かを伝えあい、コミュニケーションをする。

コミュニケーションというもの、とりわけ②人間特有の形でのコミュニケーションを、話し手が何かを意味し、聞き手がそれを理解することで成立する営みと捉えることにしよう。「意味する」というのは日本語としては馴染（なじ）みがないかもしれないが、英語の動詞「mean」に対応するものと考えることにする。また、何かを意味したり意味されたことを理解したりすることを行為の一種として捉えることにする。つまり、コミュニケーションは意味するという行為と理解するという行為から構成される営みと見られることになる。これが広く「コミュニケーション」と呼ばれるもの全般をイホウカツするような十分な記述だと主張するつもりはないが、しかし人間のコミュニケーションというものを直観的に捉えるための手がかりとしてはひとまず満足のいくものだろう。冒頭の例においては、私は話し手として「桜がすっかりきれいに咲いているよ」と言い、それによって何かを、例えば恋人にも桜をぜひ見てほしいと自分が思っているというようなことを意味し、恋人はそれを理解し、次に話し手と聞き手を入れ替えて同じようなことをウクり返し、私たちはコミュニケーションをしている。仮に「コミュニケーション」という言葉を人間以外の動物にも当てはめられるように広く解するならば、「8」の字に躍るミツバチや道標となるフェロモンを残すアリもまた仲間との「コミュニケーション」を取っていると言えはするだろう。しかし人間以外の動物にも見られるこうした振る舞いは、私が恋人に「桜がすっかりきれいに咲いているよ」と語りかけたときのコミュニケーションとは重要な点で異なっている。ミツバチやアリはおそらく自身のそうした振る舞いを意識的に制御できるわけではなく、それゆえ何かを意味するためにそれらを意図的におこなっているわけではない。また仲間のミツバチたちやアリたちもそれらを理解したうえで次の行動を決めているわけで

はなく、ただ機械的に反応しているにすぎない。しかし「桜がすっかりきれいに咲いているよ」と語りかける私は、それによって何かを意味するためにそのようなことを言っているのであり、また恋人が単にスマートフォンの画面を通じて与えられる視覚情報に反射的に反応するのではなく、私の意味したことを理解し、そうした理解をもとにしてさらなる発言や振る舞いをすることを私は期待している。私は何かを意味し、うまくいけば恋人はそれを理解し、そうしてコミュニケーションが成り立つのである。

それにしても、誰かが何かを意味するとは果たしてどういうことなのだろうか？　まずは誰かが何かを意味するというありふれた行為が、実は不可思議ですぐには理解しがたい、それゆえ哲学的な思考を誘うものであるということを、具体例を挙げながら語っていこう。

ひとつの不可思議さは、あるひとが何かを言って何かを意味するとき、そのひとは単に音を発する以上の何かをしているということである。次のような場面を考えてみてほしい。子供が玄関で靴をハイ（エ）いている。どこかに出かけようとしているのだろう。それに気づいた親が「雨が降っているよ」と声をかける。子供はドアノブを摑（つか）もうとしていた手を止め、「わかった。ありがとう」などと言いながら、傘立てから傘を取り、改めてドアを開ける。ありふれた日常の一場面である。だがその実、このエピソードはある不可解な出来事を描き出しているのだ。親が発したのは一見すると「アメガフッテイルヨ」という音声でしかない。だがこの音声そのものが持つ音響的側面をどのように分析したところで、この音声と傘を取るという子供の行動とを結びつけるものは見出せないだろう。そこには何か単なる音響的性質以上のものがある。子供はその何かを容易に理解し、そしてそれに対して応答している。ひとが音声を発することで何かを意味し、相手がそれを理解するとき、ただ音を出し、相手がそれを聴覚的に受け取るという以上の交流が生じているのだ。もちろん、声以外の方法による場合も同様だ。手話で何かを言うときなどにも、明らかに手の物理的な運動以上の何かが生じている。だがその何かとは結局のところ何なのだろうか？　こうしたことこそが何かを意味するという行為に含まれるもっとも根本的な謎だ。ひとが何かを意味するとき、いったい何が起きているというのだろうか？

親の発したのはもちろんただの音ではない、それは日本語の表現なのだ、だから単なる音響的性質以上の何かが生じているのであり、それ以上の不思議などない、そう考えるひともいるかもしれない。だが、言語の意味というものがそもそも謎に満ちているということを脇に置いたとしても、③こうした考え方では、何かを意味するという行為の実態は捉えきれない。確かに先の例において親が子供に発した音は、単なる音ではなく、日本語の文の発話となっている。だが、親が何かを意味したことになるのは、親の発したのが日本語の表現であるからでは（少なくともそれだけでは）ないのである。

そのことはふたつの方向から示すことができる。第一に、親の発した「雨が降っているよ」という日本語表現は確かに意味のある文であるが、しかしこの文が持つ意味によってだけではこれを受けて子供が理解した事柄を捉えきることはできない。実際、この日本語文そのものは発話の時点において雨が降っているということを表現しているにすぎない。しかし親が出かけようとしている子供に声をかけたとき、ただそれだけのことが伝えられ、子供に受け取られたわけではない。親は子供が傘を忘れないように気を配ったのであり、また親の発話を受け取った子供はそのことを理解し、傘を手に取ったのである。だが「雨が降っているよ」という日本語文そのものには「傘」などという言葉は出てこず、それゆえこの文自体が傘に関する意味を日本語として担っているわけではない。発話された日本語の文が持つ意味を挙げただけでは、この例で起きている不可解な出来事は説明できないのである。親が意味したのは、用いられた日本語文の意味そのものとは別のことなのだ。

第二に、実は日本語表現を用いることなく同様の例をつくることができる。出かけようとする子供のそばへと親が歩み寄り、無言で手を振って子供の注意を惹（ひ）きつけ、そのうえで窓の外を指差したとしよう。その指の先には、雨が降りしきるオコウケイが広がっている。この場合でも子供はやはり「わかった。ありがとう」などと言いながら傘を手に取るだろう。親はもはや日本語文を発話してさえいないが、それでもなお起きている現象に本質的な違いはない。だとすれば、この現象は、用いられた日本語文というものを持ち出すことなく説明され得るようなものであるはずなのだ。

要するに、親子のコミュニケーションの例では、言葉が持つ意味とは次元を異にする、別の種類の意味というものが関与しているのである。この例において、親は「雨が降っているよ」と言うことによって、子供が傘を持っていくべきであるということ

を意味した。そして子供はそれを理解して、その助言に従った。ただしここでの「意味した」は、親が用いた日本語がそうした意味を持っているというのとは異なる意味での「意味した」なのである。冒頭で定めた意味合いにおけるコミュニケーションは、こうした独特な意味の概念が関与するものとして捉えられなければならない。しかし「言葉の意味について語るときの「意味」とは異なる意味での「意味」において、親があることを意味して子供がそれを理解したのだ」などと語るだけでは現象を記述しているだけであって、現象の説明とはならない。問題は、ここで起きているのは結局のところどういう現象であり、そしてなぜ親が「雨が降っているよ」と言うことで、そのような現象が引き起こされたのかということである。これはつまり、「雨が降っているよ」と言うことで親が何を成し遂げたのか、つまりは「雨が降っているよ」と言うことで何かを意味するとは正確にはどういうことなのかを問わねばならないということだ。単に音やインクの染みといったものを生み出すということでは尽くされず、かといって単に有意味な言語表現を用いているということだけでも捉えきれない（しかも言語表現を用いなければならないわけでもない）、この「意味する」とは何なのか？

子供に「雨が降っているよ」と声をかけることで、子供が傘を持っていくべきであるということを親が意味するとき、親が発した音にも、用いた日本語表現にも、子供や傘に関するメッセージは含まれていないように思える。それにもかかわらず子供はそうした内容を理解する。これはいわば④制限つきのテレパシーだ。もちろん一切の言語や身振りを介さずして意志疎通が成し遂げられているわけではないが、少なくとも意味されている内容に明白な対応を持つものは何も介在していないように見える。それにもかかわらず、確かに意志疎通が生じているのである。そしてそうしたことはこの例に限って起きている特殊な事態ではなく、それどころか私たちの日常のありふれたワンシーンでしかない。私たちは誰もがちょっとしたテレパシー能力者なのだ。相手が使った表現にも発した音や作ったインクの染みにもそれ自体としては含まれていないはずの内容を、当たり前のように理解する。また逆に、相手がそうした内容を容易に理解してくれると見込んで、何かを言ったり書いたり何らかの身振りをしたりする。あなたが何かを意味し、私がそれを理解し、私たちがコミュニケーションをするとき、私たちはこのような不可思議で、驚くべきことをいつだって成し遂げているのだ。

問一　二重傍線部**アイウエ**の読みを、送り仮名も含めてすべて平仮名で書きなさい。現代仮名遣いを用いてもかまわない。

問二　傍線部①を現代語訳しなさい。

問三　傍線部②について、疏広の子孫はなぜこのように勧めようとしたのか、説明しなさい。

問四　傍線部③をすべて平仮名で書き下し文にしなさい。現代仮名遣いを用いてもかまわない。

問五　傍線部④について、疏広はどういうことを「不亦可乎」と言っているのか、本文に即して説明しなさい。

（三木那由他『話し手の意味の心理性と公共性』による）

問一　傍線部**アイウエオ**のカタカナ部分を漢字に直しなさい。

問二　傍線部①について、「桜がすっかりきれいに咲いているよ」というメッセージには、どのような意味が込められていると考えられるか、本文に即して説明しなさい。

問三　傍線部②について「人間特有の形でのコミュニケーション」とはどのようなコミュニケーションか、人間以外の動物のコミュニケーションと比較しながら、本文に即してわかりやすく説明しなさい。

問四　傍線部③について、「こうした考え方では、何かを意味するという行為の実態は捉えきれない」という筆者の主張の具体的な根拠となる反例は何か、説明しなさい。

問五　傍線部④について、筆者はなぜ「制限つきのテレパシー」という比喩表現を用いるのか、「制限つきのテレパシー」とはどういうことかを説明しながら答えなさい。

所以恵養老臣也、故楽与郷党宗族共饗其賜、以尽吾余日、不亦可乎。注十一於是族人説服。④

（『漢書』による）

注一　共具＝用意する。
注二　昆弟＝兄弟。
注三　従丈人所＝あなた方から。
注四　間暇＝ひま。いとま。
注五　老誖＝おいぼれる。耄碌する。
注六　田廬＝田畑と家屋。
注七　贏余＝あまり。余分。
注八　怠堕＝怠惰。
注九　聖主＝皇帝。疏広の退職時に黄金を贈った。
注十　郷党宗族＝同郷・一族の人々。
注十一　説服＝よろこんで納得した。説は悦と同じ。

問題　四

次の文章は、前漢時代の疏広（そこう）という人物が、官職を退いた後、郷里に帰って余生を過ごしている場面を記したものである。これを読んで、後の問に答えなさい。（出題の都合上、本文や訓点を省略した所がある。）

広既帰二郷里一、日令三家注一共具設二酒食一、請二族人故旧賓客一、与相娯楽。①数問三其家金余尚有二幾所一、趣売以共具。居歳余、広子孫窃謂下其注二昆弟老人広所二愛信一者上曰、「今日飲食費且レ尽。宣下従注三二丈人所一、②勧説レ君買中田宅。上」老人即以二間注四暇時一為レ広言二此計一、広曰、「吾豈③老詩不レ念二子孫一哉。顧自有二旧注六田廬一、令三子孫勤二力其中一、足三以共二衣食一、与二凡人一斉。今復増二益之一以為二注七贏余一、但教二子孫一注八怠堕一耳。賢而多レ財、則損二其志一、愚而多レ財、則益二其過一。且夫富者、衆人之怨也。吾既亡三以教二化子孫一、不レ欲下益二其過一而生上怨。又此金者、聖注九主ノ

（次のページにも問題があります。）

問題　二

「あたし」は、海辺にある「阿部（あべ）さん」の家へと、クッキーをおみやげに遊びにいっている。以下の文章を読んで、後の問に答えなさい。

阿部さんの家には、阿部さんが三人いる。一人は、女の阿部さん。もう一人は、男の阿部さん。そしてもう一人は子供の阿部さん。三人のうちの誰かに呼びかける時には、「ねえ、女の阿部さん」「あの、男の阿部さん」というふうに言わなければならない。阿部さんの家では、名前というものが嫌われているのだ。

どうして名前が嫌いになったのかと、いつか女の阿部さんに聞いたことがある。

「だって、①名前って、なんとなく枷（かせ）になるじゃない」

女の阿部さんは答えた。

「枷？」

聞き返すと、女の阿部さんはうなずき、

「ほら、せりなだって、せりなっていう名前じゃなかったら、こういうベレー帽とかかぶらなかったと思う」

と言い、あたしがかぶっている抹茶色のベレーのポンポンをさわった。

「それ、名前と関係ないよ」

「ううん、きっと関係ある」

せりなって、かわいっぽい名前じゃない。だからほら、せりながいつも着てるものだって、とんがったハイヒールにしゃらしゃらした生地のワンピースとかスカートとかじゃなく、ぽてんとしたチュニックに細いジーンズ足もとはスニーカー、っていう感じなんだよ。女の阿部さんは説明した。

「名前のせいじゃなく、あたしがそういう服装が好きだからしてるだけだよ」

注一　なまほきたるものから＝なんとなく、心が鈍くぼんやりしているのだが、の意。

注二　秋風のうち吹き返す葛の葉のうらみても＝「秋風のうち吹き返す葛の葉の」までが「うら」をいうための序詞。「うらみ」は「裏見」と「恨み」の掛詞。葛の葉は、風に吹き返されやすく葉の裏が白くて目立つところから「うら」の枕詞や序詞に用いられる。

注三　おのら＝自称の代名詞。

注四　ものへいましぬめりしかば＝よそへ行かれたらしくて、の意。

注五　はた＝…もまた。

注六　家刀自＝一家の主婦。

問一　傍線部**アイウエ**を現代語訳しなさい。

問二　傍線部①について、「文伝へける人」の発言をうけて、「男」はどのように現状を理解したか、わかりやすく説明しなさい。

問三　傍線部②の和歌を現代語訳しなさい。

問四　「上達部めきたる人のむすめ」からの返事が来なくなった理由について、本文の内容を踏まえて、わかりやすく説明しなさい。

どもを」とぞいひける。エいやしからぬ人もさるものにこそはありけれ。さて、いふかひなく聞きなしてやみにける。のちに聞きければ、いたつきもなく、人の家刀自（注六）にぞなりにける。

（『平中物語』による）

問題　三

次の文章は、「この男」が「上達部(かんだちめ)めきたる人のむすめ」との間で、数回、文(ふみ)をやりとりしたが、ある時から返事が来なくなったことを不審に思い、事情に詳しいこの「むすめ」の家に仕える別の女房に尋ねたところ、その理由が分かったという話である。これを読んで、後の問に答えなさい。

また、この男、もののたよりに、いとさだかにはあらず、注一なまほきたるものから、さすがに文(ふみ)は取り伝へつべき人をたよりにて、上達部(かんだちめ)めきたる人のむすめよばひけるを、もしいかならむと思ひつつ見けるを、男、うれしと思ひて、いひかはしけること二度三度(たたびみたび)ばかりして、のちのちはせざりければ、

身を燃やすことぞわりなき梳(す)く藻火(もび)の煙も雲となるを頼みて

とあれど、ア＿＿＿＿さらに返しなし。されば、かの男、文伝へける人にあひて、「いかなることを聞こしめしたるにかあらむ」などいひければ、「なでふことにもあらじ。まもりかしづきたてまつりたまへば」といひければ、①＿＿＿＿さもこそはあらめと思ひて、「さらば、よきをりをりに奉らせたまへ」。さて、文に思ひけることどものかぎり多う書きて、とらせたりければ、「させむ」とて持ていきけれど、また、その返りごともせざりければ、男、また、いひやる。

②はき捨つる庭の屑(くづ)とやつもるらむ見る人もなきわが言(こと)の葉(は)は

といひやれど、返りごともせざりければ、また、

注二秋風のうち吹き返す葛の葉のうらみてもなほうらめしきかな

かくのみいへど、返りごとさらにせず。あやしさに、いかなるぞ、さだかなるたよりのなきかとて、もとめける。この、文伝ふる人は、もとよりすこしほきたるやうにおぼえければ、イ＿＿＿＿とかうもいはで、ねむごろに心に入れて、尋ねければ、「いとものはかなきたよりにつけてありしことなり。その人はさだかにも知らじ。注三おのらも見しかば、はじめわたりの返りごとはすめりし。その人の、ものへいましぬめりしかば、心には思ひながら、ウ＿＿＿＿えせぬぞ。みづからは手もいと悪(あ)し、歌は注五た知らず。あたら、こと

「いやいや、そういう服装が好きになったのも、そもそも野に咲く花っぽい響きの、せりなっていう名前を持ってたからじゃないのかなあ」

そう言って、女の阿部さんは笑った。たいして本気であたしを説得しようとしているわけではないのだ。

そういえば、女の阿部さんは、いろんなタイプの服を持っている。今日は、体にぴったりはりつくようなまっ黒いミニのワンピースに、紫色のレギンス、頭には黄色いターバンをぐるぐる巻きつけている。

「それ、何ふうっていうの」

聞いてみたら、女の阿部さんは少し首をかしげた。

「インドネシア？　か、それとも、アルゼンチン？」

本人も、よくわかっていないらしい。

女の阿部さんとあたしは、会社の同僚だ。②服装の傾向が日によってあんまり違うので、あたしと会うまで、女の阿部さんには同僚の友だちがいなかったのだという。

「服装って、友人関係を左右するんだ？」

驚いて聞くと、女の阿部さん（会社では、ただ「阿部さん」と呼んでいるわけだけれど）はうなずいた。

「そうなの。どうもねえ、日本人って、ある一定の型にはまってない人間を見ると、不安になっちゃうみたい」

確かに、女の阿部さんの服装からは、女の阿部さんがどんな型をもつ人間なのか、さっぱり推し量れない。あだっぽいタイプなのか、遠慮深いタイプなのか、明るいのか、優しいのか、厳しいのか。

「なるほど、服装って、けっこう、あるかも」

「でしょ。名前も、それと同じなの」

名前と服装は、なんだか違う気がするけど。あたしは内心で思ったけれど、口には出さなかった。ちなみに、女の阿部さんの名前は、

「さゆり」という。
「ね、なんだかいかにも、さゆりっぽく育ちそうな名前でしょ」
女の阿部さんは真面目な顔で言う。
「さゆり」っぽい人間が、いったいどんな人間なのだか、あたしには見当もつかない。でも、言われてみれば確かに女の阿部さんは、「さゆり」とは違う感じがしないでもない。
「子供の阿部さんには、名前、あるの」
「あるよ、だって名無しじゃ法律が許してくれないから」
「どんな名前」
「さゆり」
子供の阿部さんは、女の阿部さんと男の阿部さんの娘だ。母親と同じ名前の子供かあ。あたしは目をまるくした。
「考えてるうちに、ぐるぐるしだしちゃったから」
女の阿部さんはにやっと笑った。

女の阿部さんは、会社ではめだたない。服装に統一性はないけれど、会社に着てくるのは女の阿部さんの手持ちの服のうち、ごく穏当なものばかりなので（あたしが女の阿部さんちを訪ねた時に着ていた、れいの紫色のレギンスに黄色いターバン、なんていう類のものは、むろん会社には着てこない）、人の目はべつにひかないのだ。仕事は真面目で、でもひどく自己主張をすることもなく、飲み会の出席率はだいたい五十パーセント。
ところが、ある時異変が起きた。
女の阿部さんを、「さゆりさん」と呼ぶ女があらわれたのである。
女の阿部さんは、ものすごく不快な顔をした。下を向いてこっそり表情を変えただけだったので、久しぶりに名前を呼ばれた女の阿部

問四　二重傍線部について、「女の阿部さん」の「こだわり」とは、どのような「こだわり」であったか、説明しなさい。

③男の阿部さんと結婚して、はじめて女の阿部さんは、自分が「阿部」という存在ときちんと同化できた、と感じた。

「だから、女の阿部さんなのか」

「そう」

「さゆりって呼ばれても、他人みたいな感じなんだね」

「そう。なんか、さゆり、っていう実体と自分とが、半分以上ずれてるような」

「でもさ」

あたしは聞いた。

「だからって、子供の阿部さんに『さゆり』って名づけるの、適当すぎない？」

女の阿部さんは、あはははは、と笑った。今日の阿部さんの服装は、羊みたいにもこもこしたミニのワンピースに、七色の縞（しま）のタイツ、それに黄色いブーツだ。

「黄色い小物が、好きなの？」

あたしは聞いてみた。女の阿部さんはうなずいた。病院の天井が、黄色だったの。ひよこの黄色。だから、黄色はあたしのラッキーカラー。

女の阿部さんは立ち上がった。青のりを歯にくっつけたまま、女の阿部さんは海辺の家へと帰っていった。

（川上弘美「ラッキーカラーは黄」による）

注　吉永小百合＝昭和三〇年代以降の映画界で活躍する女優。

問一　傍線部①は、「女の阿部さん」のどのような気持ちを表現したものか、比喩に即して説明しなさい。

問二　傍線部②について、なぜ「女の阿部さん」はそのような「服装の傾向」であるのか、説明しなさい。

問三　傍線部③について、「自分が「阿部」という存在ときちんと同化できた」とはどういうことか、本文の内容をふまえて説明しなさい。

さんの反応を知りたくてじっと観察していたあたしにしか、わからなかったはずだけれど。

「下の名前じゃなく、姓を呼んでください」

女の阿部さんは、女に頼んだ。

「あら、そんな他人行儀なこと言わないでよ。ね、せりなさんだって、そう思うでしょ」

女はあたしの方に向き直って同意を求めた。あたしは固まってただ立っていた。

「さゆりっていう名前、好きじゃないんです」

阿部さんは柔らかく続けた。呼ばれかたに堅固な主張は持っているが、女の阿部さんは決してこわばった態度の人間ではないのだ。

「あら、わたしはさゆり、好きよ。吉永小百合（注）と同じ名前なんて、すてきじゃない」

女はくらげのようにてのひらを揺らめかせながら、にこやかに言った。女の阿部さんは小さなため息をついた。女は、気づかないふりをした。

あたしたちの会社には、女が多い。そして多くの女たちに肩書が与えられている。女の阿部さんは、係長だ。女の阿部さんを「さゆり」と呼ぶ女は、次長である。上司の言葉には、さからわず。昔からの会社の決まりだ。

「セクハラだって、訴えてみたら」

あたしは提案したけれど、女の阿部さんは薄く笑うだけだった。いいの。昔から慣れてるから。それに、セクハラは無理だよ。じゃ、パワハラは？　ますます無理。

なぜ女の阿部さんが下の名前を使うことを潔しとしなくなったのか、あたしはあらためて不思議に思うようになった。そもそも、普通に生活していると、下の名前を呼びあう機会なんて、ほとんどないんだし。

「いや、ただのこだわり」

女の阿部さんは言った。

それがいったい何のこだわりなのかは、女の阿部さんは説明してくれなかった。会社生活は、少しずつぎすぎすしていった。女の阿部さんが名前で呼ばれることを明らかに嫌っているのは、いくら隠してもにじみ出てしまったし、すると次長はますます依怙地になって「さゆりさん」と呼び続けるのだった。

なんとなく気がはれないから、フリーマーケットでいっぱい服を売ろう。

と、女の阿部さんに誘われた。

そんなに売るほど、服持ってないから。と言うと、女の阿部さんは、じゃあ、あたしの服売るの手伝ってくれる？ と聞いた。

フリーマーケットの日は、雲一つない晴天だった。女の阿部さんの服だけでなく、男の阿部さんの服も子供の阿部さんの服も、値札をつけてきれいに並べた。服はどんどん売れた。いちばん高いのが五百円で、三十円、なんていう値をつけられたものもあった。

すべての服がなくなったのは、まだ午後三時にもならない時刻だった。

「あー、売れた売れた」

女の阿部さんはのびをした。小銭を入れた、いつかあたしがおみやげに持っていったクッキーの空き缶を、女の阿部さんは上下に揺らした。じゃらんじゃらんという、いい音がした。

「何か食べよっか」

女の阿部さんは言い、あたしの答えを聞く前にすたすた歩きだした。やがてやきそばの屋台の前できゅっと立ち止まり、大きな声で「二つ」と注文した。

芝生に座って、二人でやきそばを食べた。三十円のＴシャツを値引きしようとごねたおばさんの是非について、あたしたちは喋った。それから、五百円のニット帽を買って千円札を出し、釣りはいらないといばったおじさんについても。

「おじさんの方に、一票」

「いや、おばさんの粘りも、あなどれない」

女の阿部さんの歯に、青のりがくっついている。ずっと座っているうちに、お尻が冷えてきた。女の阿部さんは、唐突に上を向いた。青のりがくっついたままの歯を見せて、口をぽかんとあけ、しばらく青空を見ている。

「あのさ」

女の阿部さんが言った。

「あたし、一回死んだことがあるんだ」

ぎょっとして、あたしはほんの少し目をそらした。上を向いたままの女の阿部さんが、目をそらしたことに気づいていないといいなと思いながら。

「事故で、脳波が停止したの。でも、ほんの少ししたらまた、脳波、出てきたんだって」

女の阿部さんは、ゆっくりと喋りはじめた。

いったい脳波というものは、そんなに簡単に「出たり入ったり」するものなんだろうかと驚きながらも、あたしは阿部さんの言葉にじっと耳をすませた。

「仮死状態になったんだけど、また生き返ったらしいんだ」

そうなんだ。おっかなびっくり、あたしは答える。

女の阿部さんは、十五歳の時、車の前に飛び出した友だちをかばおうと車道に走り出て、そのままはねられたのだった。意識不明の重体が一週間続き、やがて脳波は停止した。けれど、ご臨終です、という医者の声に、お父さんとお母さんが号泣しはじめたところで、ふたたび脳波計に波があらわれたのだという。

「よかったね」

「うん。でもあたし、その前の記憶を、全部なくしちゃったの」

以来、女の阿部さんは、自分が「待田さゆり（待田は、女の阿部さんの結婚前の姓だそうだ）」という人間なのだという実感を持てないまま、生きてきた。